

唐津藩水軍（船ぞろい絵図）

分野 歴史
地域 全域

◎地図・写真・統計資料など



（「小島家資料」より：松下麗氏提供）

藩の水軍については、寺沢氏の時島原の乱で唐津藩からも軍船を出している
ので、その時既に水軍の組織は成立していた。

又、正保元年（1644）6月8日朝唐津湾の高島と姫島とのあいだに約90
メートル程ある黒船を見つけて、黒田藩、平戸藩、小倉の小笠原、防長の毛
利まで出陣し、寺沢、黒田の数百隻の船でとりまき、柴船、草船に火をつけ
て沈めてしまった。

この絵図面は江戸後期のものであるが、このようなデモンストレーション
が何日頃から催されていたかは資料がないので解らない。考えられるのは2代
目藩主大久保の時、兵庫の明石から転封により100名以上の船手の者をつれ
てきている。大久保の前任地は海がないので、転任地の明石で船手を養成
し、将来の国防、鎖国を徹底するための幕府の考えもあったと思われる。何
故なら大久保の次の国替の時、船手は「立切り」と称してそのまま明治維新
まで200年間、唐津の海を守りつづけている。その様な中で、いつしか船ぞ
ろいが出来たのではないだろうか。

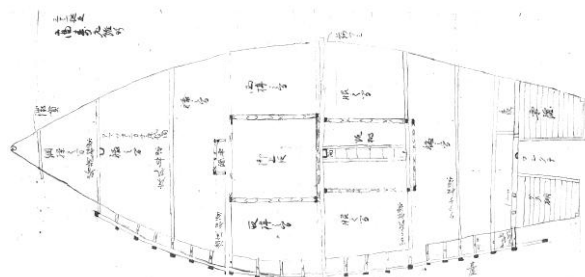
又、この絵図は、現在の陸上自衛隊が横須賀軍港で行っている観艦式の様
なもので、松浦川の河口部に藩の軍船が勢ぞろいしている。旗艦は藩主の衛
座船正中丸（60挺立）高寿丸（32挺立）清手丸（50挺立）末広丸（22挺
立）これらの大型船の周りに曳行船、他小型船が従い『先勢63隻、後勢71
隻』と記されている。

高寿丸の雛型図は長さ18メートル、幅5.4メートル、高さ3.6メートルの
大きさを約300石（45トン積）位あり砲座はない。

藩の船は船奉行が統率し、その下に大船頭、小頭、船目付、小船頭、物
書、楫取、満嶋番、唄上、内詰、艀口、乗組、平組、用番となっている。船
奉行は藩主の交替によって替っていく。船手はたえず訓練が必要で、船唄
（歌詞不明）を練習し、太鼓をたたきながら船路稽古として神集島辺りまで
いっていたようである。

◎引用・参考文献（出典）

◎エピソード・伝承・うんちく など



（「小島家資料」より：松下麗氏提供）

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html